立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
プロジェクト研究（共同プロジェクト研究）

２０１６年度研究【経過・成果】報告書

研究代表者	所属部局･職	氏　名
	文学部・教授	河　野　哲　也　　印
研究課題	死生観と道徳性の生涯発達における対話の効果についての研究	
研究組織（研究代表者・研究分担者）2017年3月現在	所属研究機関・部局・職	氏　名
	本学文学部・教授	河野　哲也
	上智大学・文学部・教授	寺田　俊郎
	東京工業高等専門学校・一般教育科・准教授	村瀬　智之
研究期間	２０１５年度　～　２０１６年度	

研究経費※	２０１５年度		２０１６年度		年度		総計	
(上段：支出金額)	3,000,000	円	2,819,722	円		円	5,819,722	円
(下段：採択金額)	3,000,000		3,000,000				6,000,000	

※1円単位で記入

研究の概要（200～300字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究は、「対話」という双方向的で、創発的、集団的な行為に着目し、そのダイナミックな過程が、死生観や道徳性の発達にどのように寄与を明らかにする。とくに哲学対話は、相互の考えや行動に大きな変化をもたらすことで注目を集めている。対話が人間の死生観と道徳性（倫理観、道徳判断、道徳的行動）の生涯にわたる発達にどのように寄与するかについて、哲学的かつ心理学的・教育学的な観点から明らかにする。学校・企業・地域の三つの場所・場面で哲学対話を実際に実践し、対話を通して参加者の死生観と道徳性にどのような変容が生じるのかを心理学的・教育学的に調査し、テーマについての思考力と反省力を深める対話の方法論について開発する。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔哲学対話　　〕〔道徳性　　〕〔世代間問題　　〕

研究【経過・成果】の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

70年代以降、実践的哲学として発達してきた「哲学対話 Philosophical Dialogue」は、参加者が自由な立場で人生、倫理、価値、社会等について真摯に語り合い、相互の考えや行動に大きな変化をもたらすことで注目を集めている。哲学対話がどのような形で自己意識に変化をもたらすかを明らかにするとともに、対話を自己教育的な方法論として捉え、その方法を進歩発展させることは本研究の目的である。ただし本研究は２年間限りであり、以上の目的を遂行するための以下の準備的・試行的な段階が中心になる。① 哲学対話の方法論を示したインストラクション教材（ビデオ、PP、DVD資料）を作成する。②反省的・批判的思考の発達測定尺度、テストの改良を行う。③発達の効果を評価するためのインタビュー項目、アンケートの質問項目などの作成。④新しい現場の開拓：対話実践の現場を広げ、さまざまな場所で多様な人々に対話に参加してもらうために実践の現場を広げる。

まず、①であるが、2015年度は子どものための哲学対話のビデオを作成したが、今年度は、成人向けの哲学カフェの作り方・実施の仕方のビデオを作成した。立教大学内（ライフスナイダー館）で許可を取り、カフェフィロ、NPO法人こども哲学・おとな哲学アーダコーダの協力を得て、研究分担者の寺田俊郎によるファシリテーションのもとで、インストラクション・ビデオをビデオ制作会社に依頼して制作した。ドキュメンタリーとインタビューの組み合わせた映像とした。本編とダイジェスト版を作り、YouTube 上で公開した。これにより、哲学カフェを実施してみたいと思っているが、著作や伝聞だけに頼って行うことに不安を感じている一般の人たちに、哲学カフェの具体的な方法と雰囲気を伝えることができた。YouTube上での視聴回数は好調であり、昨年のビデオは1500アクセスを超え、本年度のものも公開１ヶ月で500アクセスに達している。

本編URL：https://www.youtube.com/watch?v=nYauKie-1E0&t=56s

ダイジェスト版https://www.youtube.com/watch?v=k-Y_aqIT2-A&feature=youtu.be

哲学プラクティス連絡会のウェブ上でも紹介している。http://philosophicalpractice.jp/document/

次に②と③の哲学対話の教育的効果に関する発達測定とテストの改良は、昨年度十分に展開できなかったが、本年 2016 年度は江戸川区子ども未来館（http://www.city.edogawa.tokyo.jp/miraikan/）と提携し、月一回（第二日曜日）「子どもアカデミー・ゼミ」としてこどものための哲学対話を一年間実施することができた。その間、教材（絵本、児童書）、教育用資料、教育手順、効果測定方法などを江戸川区文化教養部健全育成課の松井朋子氏と未来館職員、本学の大学院生・学生、他大学の院生やヴォランティア・スタッフと共同で工夫・開発することができた。哲学対話を実施した後に、対話ファイシリテーションの振り返りと図書選定について検討を加えた。その成果は、河野哲也・得居千照 「子どもの哲学の評価法について：理論的考察と江戸川区立子ども未来館での実践を踏まえた提案」『立教大学教育学科研究年報』第60 号に発表した。

インタビュー項目、アンケートの質問項目についても、上記の子ども未来館での経験をもとに作ったアンケートや質問項目を、以下で述べる気仙沼の「子ども哲学探検隊」などで実施した。まだ回数が多くないが、それを繰り返し、哲学対話が思考力とコミュニケーション力を伸ばし、最終的に道徳観や死生観の深まりに寄与し得ることを実証できると思われる。

子どもの哲学の評価方法（成績のつけ方など）については、昨年度は関東学院小学校とお茶の水女子大学附属小学校で講演会を行ったが、今年度も、お茶の水女子大学附属小学校にとくに哲学対話の方法と評価の仕方について指導を行った。2016 年 12 月 15 日にはお茶の水女子大学附属小学校第 79 回教育実際指導研究会で、対話評価の方法について講演・協議を行い、2017 年 3 月 24 日同小学校の公開授業における研究協議で授業評価に関するコメントをした。

研究【経過・成果】の概要　つづき

同様に、哲学対話とは別の出自ながら、方法論において極めて類似している、上野行一氏主催の「対話による美術鑑賞」「美術による学び研究」と交流、情報交換を行い、本研究 RA の井尻貴子、研究分担者の村瀬智之とともに、「美術による学び研究会」2016 年度大会（2016 年 9 月 17～18 日,北翔大学北方圏学術情報センターPORTO,札幌）では、シンポジウムとワークショップでやはり対話の教育的効果と評価法について発表・討論した。2016 年 12 月 2 日に文京高校で行われた都立校長会での哲学対話を紹介する体験型ワークショップでも評価についての講演と質疑を行った。

④新しい現場の開拓については、今年度も大きな成果があった。

まず、昨年度に設立した哲学プラクティスに関わる人たちのための連絡会、「哲学プラクティス連絡会」の第二回大会を 8 月 27～28 日の二日間に渡りに本学で開催した。今回は、ワークショップ、シンポジウム、トークセッション、プレゼンテーション、ブースを一般に公募し、第一回よりさらにアカデミズムに陥らないように工夫した。この連絡会は研究者だけではなく、哲学プラクティスに関心を持つすべての人（子どもを含む）が集える場である。2 つのシンポジウム、4 つのトークセッション、9 つのワークショップ、9 つの個人プレゼンテーション、7 つのブースといった多彩な方法で、方法論、教育論、ビジネス対話、被災地での活動、医療臨床場面での対話などさまざまなテーマについて議論と意見交換、交流がなされた。高校生によるプレゼンテーションもあり、来場者数はのべ 250 名を超える盛会であった。「哲学プラクティス連絡会」計二回の成功は、日本の哲学プラクティスにおけるプラットフォームとなりえ、本 SFR における最大の成果と言えるだろう。

第二に、学校あるいは課外活動を現場とした哲学対話、すなわち「子ども哲学」としては、多くの実践を重ねた。江戸川区子ども未来館の活動は継続的な成果である。豊島岡女子学園での学期一回の図書館哲学カフェはすでに2017年3月で14回を実施した。千葉県立東葛飾高等学校公民科・内久根直樹教諭と連携した哲学教育は3回目となっている。文部科学省のスーパー・グローバル・ハイスクールの一環としての「OECD地方創成イノベーションスクール2030・広島クラスター」の一環としての広島県立広島高校での一学年全体での哲学対話の指導（2017年1月23日）は昨年に続いての実践である。単発の哲学対話の紹介・入門的活動としては、芦花小学校サマーワークショップ（2016年8月25日）一般社団法人（非営利型）子どもの成長と環境を考える会と連携した海老名市有鹿小学校（2016年7月25～26日）、大東文化大学第一高等学校（2017年3月13日）

また、「（３）地域での哲学対話」の実践は、2016 年 7 月 30 日琉球新報社にてこども向け哲学対話（りゅう PON 哲学カフェ、テーマ「いじめって何で起こるの？」）を行った（参加者 25 名）、翌日 31 日でジュンク堂那覇店での哲学カフェ（テーマ「人はなぜ本を読むのか？」）を扱った哲学カフェ（参加者 20 名）を行った。琉球新報りゅう PON 子ども新聞（2016 年 8 月）にその様子が掲載された。

さらに、2016年10月30日9:30～16:00には、気仙沼市教育委員会、気仙沼図書館、岡田新一設計事務所と共催して、気仙沼図書館と中央公民館をベースとして行った「気仙沼てつがく探検隊」では、本学の兼任講師であった奇二正彦氏（生態計画研究所主任研究員）、現兼任講師の柳瀬寛夫氏（岡田新一設計事務所 取締役社長の助力を得て、地域のフィールドワーク（自然探索、面工房訪問）と哲学カフェ、図書館での図書検索を交えた実践を行った。本学からは、河野哲也、中村百合子、福井夏海（異文化コミュニケーション研究科博士課程前期課程修了生）、渡邉文（文学研究科博士課程前期課程）が参加し、子ども参加人数は7名ながら大好評を得ることができた。この地域での哲学対話は、2016年10月に採択されたJST社会技術研究開発センター（Ristex）平成28年度「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域研究開発プロジェクト「多世代哲学対話とプロジェクト学習による地方創生教育」に受け継がれ、この採択により本SFR研究は終了し、予算残額を返還した。

※　この（様式２）に記入の【経過・成果】の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（Ａ４縦型横書き１枚・自由様式）を添付すること。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

①雑誌論文：

1. 河野哲也「ビジネス倫理学からみた不正会計：多様性と対話で組織を成長させる」『企業会計』 No.68(2016/6), pp.51-58.
2. 河野哲也「「こども哲学」が目指す「対話力」とは何か」『月刊 教職研修』 2016年9月号, pp. 32-33.
3. 河野哲也・得居千照 「子どもの哲学の評価法について：理論的考察と江戸川区立子ども未来館での実践を踏まえた提案」『立教大学教育学科研究年報』第 60 号(2017/3), pp.41-55.

②図書：

1. 河野哲也「第五章 問いを自分で立てさせるための工夫」, pp.101-126, 成瀬尚志編著『学生を思考にいざなうレポート課題』ひつじ書房, 2016年10月.

③シンポジウム・公開講演会：

1. 河野哲也,「哲学プラクティス連絡会挨拶」『哲学プラクティス連絡会第２回大会』2016年8月27日, 於: 立教大学池袋キャンパス.
2. 河野哲也・上野行一・井尻貴子・山崎正明, シンポジウム提題:「こどものための哲学」と「対話による美術鑑賞」, 美術による学び研究会, 2016年9月17日,北翔大学北方圏学術情報センターPORTO, 札幌.
3. 河野哲也・井尻貴子・村瀬智之, ワークショップ:「「こどものための哲学」の方法を学ぶ」, 美術による学び研究会, 2016年9月18日,北翔大学北方圏学術情報センターPORTO, 札幌.
4. 河野哲也 招待講演:「哲学対話について」東京都校長会の学校改革部会主催講演会, 2016年12月2日: 15:00-17:00, 於: 文京高校.
5. 河野哲也 シンポジウム提題: “The Place of thinking” *The 7th PEACE (Phenomenology for East Asian CirclE) Conference*, December 18, 2016, The University of Tokyo, Komaba I Campus.
6. 河野哲也 招待講演:「哲学の社会的責任：哲学対話＋地方創成教育の試み」神戸大学先端融合研究環人文・社会科学系先端融合研究領域主催, 「メタ科学技術研究プロジェクト：方法・倫理・政策の総合的研究について」, 2017年3月9日: 15:00-18:00, 於: 神戸大学大学院文学研究科.
7. デヴィッド・ホワイト著・村瀬智之監訳『教えて！哲学者たち：子どもとつくる哲学の教室』〈上・下〉、大月書店、2016年.

④その他：

1. 岩手大学・立教大学主催「陸前高田グローバルキャンパス大学シンポジウム」での発表, 河野哲也・皆川朋生（本学教育学科修士）・秦春杰（本学教育学科修士）・廣畑光希（本学社会学部４年）・大井稜（本学教育学部４年）・宇津山栞（本学教育学部３年）・久保木優弥 （本学教育学部３年）「気仙地区における多世代哲学対話とプロジェクト学習による地方創生教育」, 2017年1月22日, 於: 陸前高田市コミュニティホール.